

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

永田 智成

【所属】(助成決定時)

無所属

【研究題目】

スペインの民主化におけるフランコ体制の制度的解体に関する研究

【研究の目的】(400字程度)

通常民主化は、旧体制の崩壊→民主制への移行→体制の固定化というプロセスをたどる。しかし、特に旧体制主導の民主化の場合、必ずしも旧体制の崩壊が民主化の契機とならず、体制の移行と同時に旧体制が解体されることもある。特に政治史研究の多くは、新しく構築される民主的な制度の成立過程にばかり着目して、旧体制の遺構の行く末にはほとんど関心を払わない。このため、旧体制機構の平和的解体が、民主化にとっての重要な検討課題とはみなされない傾向が民主化研究には存在する。

本研究は、旧体制の制度機構が存続したまま民主化に突入した場合、どのようなプロセスで旧体制の遺構が解体されるかについて考察する。全ての民主化は旧体制の崩壊から始まったとするのではなく、旧体制の解体過程というプロセスが存在することを示す。そして既得権益の解体がいかに困難な課題であり、その成否が民主化の成功に大きな影響を及ぼすということを示す。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は、スペインの事例を用いて、旧体制主導の民主化という旧体制の制度機構が存続したままの民主化において、どのように旧体制の制度解体が行なわれ、その意味はどのようなものであったかについて考察した。

一般にスペインの民主化において、旧体制の制度機構は政令法等により自動的に解体が行なわれたと考えられている。しかし既得権益の牙城である旧体制の制度解体に反対する者がいなかったとは考えにくい。政令法で自動的に制度解体が行なわれたとするのではなく、政令法が実施できるレベルまで反対派との合意形成を政府が図ったと考えるのが普通である。

そこでまず、旧体制の機構の歴史に関する研究書を入手し、基礎研究を行なった。具体的には、旧体制のファシズムの機関である治安裁判所に関する研究、スペイン議会史、体制唯一の公式政党であった国民運動(ファランヘ党)史、官製の労使一体となった組合である垂直組合の解体過程に関する論文等の二次文献を渉猟した。

二次文献渉猟の結果、設定した仮説の通り、自動的に解体がなされたと述べる研究が多く散見されたものの、比較的研究が進展しており、手掛かりを発見できた国民運動と垂直組合に本研究の対象を限定することとした。治安裁判所に関する資料及び議会に関する資料は、個人情報が含まれていることを理由に、現地史料館での資料入手が困難であるということも上記二点に絞っての調査を行なった理由である。

資料調査に関し、総合行政史料館にて調査を行なったが、資料点数が膨大であり、短期間での成果を見出すことが困難であることが判明した。そのため、同史料館に相談を仰ぎ、ある特定の県に焦点を絞るとよいのではないかとアドバイスを得た。そのアドバイスに基づき、各県において最も資料が整理されているとされるバルセロナ県中央政府代表事務所資料館にて調査・資料収集を行なった。

またバルセロナ通信大学の研究者とも調査過程で知り合うことができ、彼らのアドバイスを参考にした。

【結論・考察】(400字程度)

本研究に関する調査を行なった結果、大きく分けて2点のことが新たに成果として判明した。

1点目は、旧体制の制度解体に際して、中央政府と地方支部は頻繁に連絡を取り交わし、旧体制の制度解体に関する情報統制を行ない、解体を慎重に進めていたことである。これらに関する電報の記録から、従来の研究で見られた政府の努力なく自動的に解体が行なわれたとする説は否定されると考えられる。

2点目は1点目に関連して、今回の調査で「国民運動の財産移転を掌る委員会」が創設されていたことを物語る資料が発見されたことである。今回の調査で、同委員会の存在が認められたことで、財産移転が旧体制の制度解体において大きな問題となっていたことが明らかとなった。詳細に関しては、継続的な調査が必要となるが、今回の調査が明らかにした論点を発展させることにより、スペインの民主化における旧体制の解体の意義とその手法が明らかになると期待される。